

# 薬師さまと清水池の亀

やくしさま と しみずいけのかめ



作：近藤せいけん

神奈川県厚木市の妻田（妻田）に妻田薬師というお寺様があり、その境内には、樹齢700年と言われる、巨木、古木のクスノキがあります。幹には「武田信玄」が小田原城を攻め、帰路、社堂に放った火が、燃え移った痕が残っています。

そのすぐ近くに、小さな湧き水の池があります。

「薬師様の清水池」と呼ばれています。昔偉い、お坊様が薬師堂で七日七夜の修行をされ、満願の朝方、清水池に蓮の白根がいっぱい伸び、きれいな花が咲いたと伝えられている池です。

そこには昔から大きな亀が住んでいます。今からずうっと昔、江戸時代のお話です。

ある朝、薬師様からほど近い妻田村の田んぼの小路を一匹の小さな亀がゆっくり、のそり、歩いていました。そこえ野良犬がやって来て、亀を吠え、足で甲羅をひっくり返し、噛みついていた。

そこへ野良仕事からの帰りの、一人の男の子がきました。

名を次助と言います。田んぼや畑の仕事を、病気の父に代わり、母親と幼い兄弟と力を合わせ、作物を作っています。

次助はくわを持ち上げ、野良犬に立ち向かいました。

「あっちへいけ！亀からはなれろ！たたくぞ！いけいけ！」

六助は野良犬の足もとに、くわで思い切り「ざっく！」と土を削りました。

野良犬は驚いて、「きゃん、きゃんきゃん」と叫び飛びのき逃げ去っていききました。

「亀よ、よかったな～、もう大丈夫。怖かっただろう、傷はないか？さてどうしようか、おまえはどこからきたのか？」

次助は考えました。

「そうだ、この近くの池というと、薬師様の清水池じゃろ。清水池まで連れてってやるから、安心しなよ」

六助は背中の籠に亀をそっといれました。そして薬師様の清水池を目指して歩きはじめました。途中で、迎えにきた、幼い妹弟に出会いました。

「にーに、籠に何が入ってる？」

「これか。亀だよ。」

「亀？どうするだあ」

「薬師様の亀だと、思うだあ。」

「清水池に逃がしてあげようと思うだあ。」

「そうか～じゃあいこう」

皆で、掛け声をかけ、手をつないで清水池向かいました。

池に着きました。さっそく籠をおろし、やさしく亀をだき池に放してあげました。亀はうれしそうに水から頭を出し、泳ぎ回りました。

兄弟は亀をやさしくみつめていました。

「薬師如来様、如来様、どうか、おとうの目を治して下さい」

「どうか、どうか、おねがい、いたしますだ～」

「目を見えるように、おねがい、いたします。」

幼い兄弟も手を合わせ「如来様」に祈りました。

また手をつないで、妻田村の家にいそぎました。

家では、母のたかが、正月用のお飾りを一生懸命作っていました。目の見えない父も器用にわらを編んでいました。

「お母、に一にが今日、畔道をよちよちあるいていた亀を、野良犬から助け、薬師如来様の池に戻してあげたんだよ」

母 「そうか。それはいいことしたねえ〜」

父 「そうか。如来様のご利益があるぞ、あはは」

母 「それじゃ、晩飯にするか。お隣から頂いた美味しい煮付けがあるぞ。」

次助 「かか、手伝うから早くしてくれ、腹がすいた」

貧しいながら、一家そろっての晩飯である。笑いが絶えない家族の一日が終わり。床についた。

次助は不思議な夢を見た。

夢の中に薬師如来様がお出ましになり。こう告げた。

「次助や、きのうは、わたしの使いの亀を助けてくれて、ありがとう。礼をいいます」

「御礼にあなたの願いを、聞きとどけよう。」

「おとうの、目を治してあげます。」

「朝日が上がり、その光が清水池に届く時、池の水を汲みなさい。その水で、おとうの目を洗いなさい」

「さすれば、ただち目の病は去り、元の自然の目にもどっているでしょう。」

次助ははっとして飛び起きた。あたりはまだ暗かった。

「これは、如来様のお告げだ!」、すぐに衣服を整え、

木の桶を持ち、まだ暗い夜明け前の小道を急いで、薬師如来様の清水池に向かった。

清水池に着くと、「薬師如来様」祈りをささげました。

「どうか、如来様、ておとうの目をお治し下さい!」

「どうか、どうか、おねげいたします!」

「お告げのとうり、お水を汲んでまいりますだ」

次助は朝日の上がるのいまかいまか、と待った。しばらくして、東の空がだんだん明るくなり、最初の朝日が清水池に届いた。すると、池の上がぱあっと明るくなり、「薬師如来様」がおでましになった。

次助の持っていた桶が音も無く移動し、清水池のお水を汲んだ。そしてまた、音も無く次助の手もとにもどった。

「次助や、亀を助けてくれた善行、そして日頃のおまえの親孝行、よき事、よき事、つづけよ、」

と告げると、薬師様のおすがたは消えた。

次助は薬師様に深ぶかと頭をさげ、薬師様の聖水を入れた桶を持って家に急いだ。

「おとう、おとう、薬師様のお水をいただいてきた!」

「おかあ、おかあ、きてくれ!」

「りゅう、ゆあ、みんなきてみる!」

家族が皆、土間に集まった。

「次助、どうした?何があったじゃ〜」

「に一に、なんじゃ?」

次助が昨夜の夢の話をし、清水池の「薬師如来様」がおん自ら、お水を汲んで、渡していただいた事を告げた。

家族全員が妻田薬師様に向かって、手を合わせ祈った。

「おとう、目を洗え」

皆が見守る中、おとうは、両手を桶に入れ、目をゆっくりと洗い、水の中で両眼を開いてみた。

「おお、おお、見える！俺の指が見える。見えるぞ！」

「ありがたや！ありがたや！見えるぞ！うおおおう」

「本当か！おとう、おとう！」

「おとう、おとう！このゆあが見えるか、おとう！」

「見えるぞ、見えるとも！おかあも、次助も、りゅうも、みんなみんな、見える」

「薬師様、ありがとうございます！うう、うっうっ」

「よかった！よかった！薬師様、ありがとうございます！」

一家は、妻田の薬師様にいつまでも、いつまでも、長い祈りを捧げました。

(終わり)